

## その他

### 苦難の中の友情

石川県 中川 初枝

昭和十二年八月、私が女学生るときに、父は応召しました。弟も商業学校に通っていたので、私は女学校に通うことが続けられるかが心配でしたが、父親が応召した家は授業料が免除されることになったので、昭和十四年三月県立小松高等女学校を卒業することができました。戦争がだんだん広がっていく中で私は軍需工場の小松製作所に事務員として入りました。増産のかけ声も大きく会社は活気にあふれていました。

九月に入ると、北支の自動車部隊にいた父が帰還し

ました。それまでの二年間、母は五人の子供をかかえて田畑から山仕事まで大変な苦勞をしていました。そこへ父が帰還したことでみんなの喜びようも大変でした。村のお祭りが近づき、秋の取り入れの最中でしたので、父は休む暇もなく田んぼに出ていました。私も手伝いに出ているとき、父は戦争の話を交えながら中国という国はいかに広大な土地であるか、そしてそこに住む民衆はゆつたりとしていて大らかでとてもいい所だと話してくれました。父自身もあんな広い所で何か商売をして見たいとも言っていました。こんな小さな山村とはわけが違うとも言いました。そのときは、ただ何となく、話として聞いていたものです。

昭和十六年の夏、小学校の山田定一校長先生が見えて、父に「小学校で今先生が足りなくなったので私に

手伝ってほしい」と頼みに来られました。私は父から話を聞くと、第一に子供が好きだったし、父もその方がいいと言ってくれましたので、会社をやめました。私はてっきり小学校の代用教員になるのだと思っていました。校長先生から早速養成所に入るようにと言われ、松任町の指定された所に行きました。そこには、「石川県立女子青年学校指導員養成所」という看板がかかっていました。私より少し年輩の人も入れて生徒三十人、先生四人の小さな女学校の延長のような所でした。全寮制で和裁、洋裁、割烹の時間が大半でした。私は女子青年学校指導員の辞令をもらって小学校一年生の臨時の受持ちでした。子供たちと慣れてくると毎日が楽しくて、今思うとこの時期が私の青春の総仕上げだったかと思えます。そんなときに、中国で鉄道員になっている母の従弟からの縁談がありました。父は乗り気だったのです。私の意思など二の次で親のいいなりでした。その年の十二月八日に太平洋戦争が始まり、くる日もくる日もやっと学校にも子供にも慣れてきたのになった一年でやめて中国に行くのはとても忍

びなかったのですが、父は中国に行ってまた学校の先生をすればいいと言って、私を慰めて中国行きをすすめました。父は私を先に中国に送って置いて自分も後から中国に渡るつもりだったらしいのです。昭和十七年一学期が終わると、私は後ろ髪引かれる思いで学校をやめました。十月二十四日、私たちは主人の実家で結婚式を挙げました。四日後の二十八日に中国への旅立ちでした。

船旅と長い長い汽車の旅は満州の鉄嶺に親せきがあつてそこで一休みして、河北省宛平県長辛店に着いたのは、十一月三日で明治節（現在の文化の日）の日でした。長辛店の第一歩はそれはそれはきれいな青空が広がるすばらしい秋空でした。私たちは一カ月の内地旅行に行かれた留守家族の家をしばらくお借りして住んでいましたが、十二月になって移転した所は、長辛店揚公莊三号、そこはいう所の四合院の中の一棟でした。それが私たちの杜宅でした。大きな門を入ると中国人が二、三人大きな声で話をしていました。何か嬉しいことでもあるような笑いながら、私がちよっとお

じぎをすると向こうもべこりと頭を下げて笑い、私を安心させてくれました。私は主人の後から家に入ると、そこは中国ふうではなく、改造した八畳の一部屋がありました。荷物を納めて畳に座るところが私たちの家で、これから中国での生活が始まるのだと思うと、異国での不安やら期待やら、こもごもと感無量でした。主人は同郷の寺本武雄様の紹介で、華北交通の長辛店警務段に勤めていました。この四合院の一郭には真向かいに張さんや斜め向かいには陶さん、後には王さんと梁さんの中国人ばかりの家でした。張さん父子と陶さんは同じく華北交通機務段に勤めていました。右も左も分からぬまま言葉も全然通じないのに、なぜか心が通じてと言いますか中国人の方が私に合わせてくれたのでしょうか。特に張さんは奥さんと息子との三人家族でしたが、その奥さんは当時四十三歳とかで私の母より三歳年上でしたので、私はおばさんと呼んでいました。私たちはここに來て間もなく、主人は単身で周口店分駐所に赴任しました。そんなこととは知らなかつたので、私はだまされたように思いました。周口店勤

務が十月で終わる予定だったのが、適任者がなくてしばらく延期になったのです。私の心細いことといったらこの上なしでした。夜空に月を眺めては内地が懐かしく、親が恋しくて幾日も涙、涙の日が続きました。そんな私に張さんのおばさんは、水くみの心配から石炭の使い方からいろいろと至れり尽くせりの面倒を見てくれました。私は有り難くて母とは別れて来たのに、この異国でもう一人のお母さんができたように思い、とても幸せだと喜んだものです。周口店は有名な北京原人の化石が発掘された所です。私も一度見に行きましたが、すごく深い深い岩穴の中でした。昔の人でよくこんな深く大きく掘れたものだと感心しました。

翌年昭和十八年二月一日付けで主人は長辛店勤務になり、やっと落ち着いた生活ができました。私はこの四合院の中で本当に親切な中国人に巡り会ったことが、私の一生に大きくかかわったことを今更有り難く感謝の念でいっばいです。私の父が見た中国人は、おおらかさ、心が広くて少々のことには動じないこんな中国人のことを言ったのだろうと思ひ、父が私を中国に行

かせたかったわけもありません。

三月十六日午後、「チキトク」の電報を受け取り、追っかけて死亡の電報が届きました。母からは父の容体が思わしくないこと、転院したことなども知らせてきましたが、あの筆まめな父からは一通も手紙が来なかったのです。私を先に中国に送って自分も中国で一働きしたいと言っていた父は、私の結婚式の前から体の不調を訴えていましたが、まさかそれが今生の別れになるとは夢にも思いませんでした。数え年四十四歳の春でした。私の中国に渡る動機を与えてくれた父がと思うと、本当に残念でなりません。そんなとき、ちょうど内地に帰られる寺本様にご一緒していただき、急遽実家に帰りました。父は私の中国行きをどんな気持ちで小松駅に送ってくれたのでしょうか。あれからたった半年も経たぬ間に、あの大きな体が小さな箱に納まっているのを見て私は周りをはばかりることもなく慟哭しました。二、三日寂しくて父を思うことばかりでしたが、四日目の朝、私はひどい腹痛を覚え苦しんでいると、母は近所のトラックをお願いして小松

の病院に連れて行きました。流産だったので。無知といおうか何といおうかそんなことは知らずに、はるばる中国から帰ってきたものです。しばらく養生をしましたが、四月上旬に、今度は寺本様がお母さんを中国に連れて行かれるとのことで、その日と合わせてもらってまたご一緒させていただきました。無事に中国の長辛店の家に着いたときはやはりホッとしました。私の留守中は向かいのおばさんがいろいろと面倒を見てくれたそうです。

昭和十九年二月十三日、長男哲邦が生まれました。予定日が近づくとおばさんは、今日はどうか今日はどうかと言って訪ねてくれました。当日になると、あまり大きなお釜などがないので、どこからか大きな金盥を二個持ってきてお湯の用意をしてくれました。主人もちょうど日曜日だったので、何も手につかないようでした。主人の同僚の奥さんがお産婆さんでしたのでお世話になりましたが、向かいのおばさんの準備の適切なのに感心させられました。長男が生まれたことでおばさんは孫でもできたかのように喜んでくれま

した。物も言えない間から「小テツチャン」と呼んでかわいがってもらいました。六月に入ると主人は涿県の分駐所長を命ぜられて、それから戦後の終結の日まで勤めました。

昭和二十年八月十五日は長辛店には珍しく、大雨が降りました。いつもは牛やろばの通り道になっている水のない川がその日は大変な大洪水になりました。私は川の水を見ようと思つて門の所まで行くと四人ほどの兵隊さんが、正午から重大ニュースがあるから聞かせてほしいと言つて、私の家の前に立たれました。「中へどうぞ」と声をかけましたが、「このままで」言つて窓越しに立つたまいました。正午になつてもラジオの雑音がひどくて言葉がはつきりしませんでした。兵隊さんの一人は「天皇陛下だ」と言われました。じつと聞いているうちにこの大戦争に負けたこと、これで戦争が終わつたことがようやくわかりました。兵隊さんたちはだれも言葉もなく黙つてすごすごとお帰りになりました。私もこれはどうしたことだろうと信じられない気持ちでした。午後になつて張さんのおほ

さんが来られ、「あなたたちは大丈夫、悪者が来たら追い返してやる。中川さんは私らで守るから安心なさい」と言われた。そのあと哲邦も一歳半になるとおほえた中国語でおぼさんのことを「蘇大媽」と呼んで懐いていました。「日本人はみんな国に帰るのか。中川さんはここにいたいらい」とも言つてくれました。夕方七時ごろに帰つた主人の顔からは血の気が引いたようでした。私は何の言いようもなく、「ただこうなつたからには、内地に帰るしかないでしょう」と言つたが、主人は言葉少なに「没法子か」と一言でした。主人にすれば自分は三男でもあり、山村の小さな所にいるよりこの広い大陸で、と夢も抱いて来たのだろうが、この敗戦という悲しい現実にはどうすることもできません。こんなときでも翌日から引き続き会社に行つていました。

九月の中ごろに街に出て買い物していると寺本さんの奥さんに会い、「日本人街の人はもう引揚げの準備にとりかかっているから、中川さんも段取りをしたらい」と言われた。何をどうするかと聞くと、「ま

ず身の回りのものを整理すること」と言われました。整理ということとは、わずかの家財道具と衣類などを最小限にして中国人に買ってもらうということでした。私は急いで取りかかったが一枚一枚の着物も母が切符制の中から作ってくれたものです。まだ手の通さない物も何枚ありました。どれもこれも私には離し難い大切な宝でした。でも今はそんなことを言っている場合ではありません。張さんのおばさんに話をして中国人の女の人に話しかけてもらいました。午後になると、せまい部屋に八人も中国人が集まって来ました。最小限の要る物だけは残して部屋の中に広げました。私はそのとき、もう六カ月の身重の体でした。何よりもオムツに使うものが最も必要でした。木綿物だけはしっかりと残しました。カラッポになった部屋にぼかんとしているとき、張さんが梁さんの主人を連れて来ました。後の家の梁さんとはあまり付き合いがなかったのですが、今日はミシンを売ってほしいとのことでした。日ごろは付き合いが無いといっても近所の人ですから、どっちみち置いていくしかないのです。「いくらでもい

いわ」と言ったら、「それなら四万円でどうかしら」と、張さんが口を切られた。私はびっくりしました。先ほどまでに売りさばいた私の宝物の二倍以上の値でした。私はこのミシンのお陰でその後の引揚げまでの生活を支えることができました。あまり付き合いのなかった隣人でしたが、どれだけ感謝したかしれません。鏡台は張さんにもらつてもらい、陶さんには、一枚あった旗袍（中国服）を上げました。これは張さんのおばさんに教えてもらつてミシンの部分だけ自分が縫つて、あとはほとんど作つてもらつたものです。たつた一度だけ街におばさんと一緒に出掛けたとき、着ていて、とても喜んでくれたものです。

引揚げがだんだん実感として分かってくると、こんなに親しくしている張さんとも別れる寂しさと、また内地に本当に帰られるかどうかの不安や、母や家族に会えると思う嬉しさと、複雑な気持ちの毎日を通っていました。そんなとき、張さんは、蒋介石総統はラジオで日本の民衆には危害を加えないように、戦争は一部の軍人のしたことであるからとか、「怨みには徳

を以て報いよ」とかそんな意味のことが再三放送されているから、何の心配もいらぬ大丈夫だと言って慰めてくれました。戦争に負けたのに不思議なくらい平穏な日が続きました。

十月二十四日午後張さんが来られて、今、街で大変な騒ぎになつてゐるとのことでした。八路軍と国府軍との交戦があるということです。私たちは八路軍が怖いということを知っていましたので、恐ろしくて震え上がりました。主人もまだ帰らず私は子供を抱えてオロオロしてゐるとき、張さんは「大丈夫、大丈夫」と言つて、少しの家財をいくつかにまとめて自分の家のオンドルの下にかくしてくれました。私と子供を奥の部屋にかくまってくれました。午後四時ごろ陶さんが来て、中川さんの主人が今大勢の中国人に囲まれて、さんざんメッタ打ちされてゐて、陶さんが目撃しながら口も手も出なかつたと言つて青い顔をして来られました。張さんと二人で現場に駆けつけたが、現場にだれもいなかつたと言つて二人で帰つて来ました。どうしたのだろうか。どこかに連れて行かれたので

はなからうかと心配でなりません。しばらくすると外で何か日本語でもあるような中国語でもあるような話し声が聞こえました。そのうち静かになつたかと思うとまた何か大きな声がかきこえました。今度は寺本さんが兵隊さんを三人連れて、私たちを迎えに来てくださったのです。その先の話し声は張さんの知らない兵隊さんばかりで、私たちを迎えに来てくださったのを、張さんは「この日本人は私の方で保証するから帰つてくれ」と言われたのだそうです。寺本さんは張さんもよく知つた人だったので、寺本さんならということだったそうです。寺本さんは、主人はけがはしているが命に心配はないし、今、集結所に来てゐると知らせてくださった。主人は中国服の便衣というのを着てゐて、人違い（スパイ）されたそうです。どんなけがが分かりませんが、皆さんと一緒にあらばと一安心しました。兵隊さんは張さんの家にかくしてあつた荷物を荷車に乗せ、私も長男をおんぶして、寺本さんと兵隊さんに集結所へ連れて行つてもらいました。それが張さんとの長い年月の別れになるとは夢にも思ひませ

んでした。集結所はすぐ近くだと聞いていましたので、またいつでも会えるように思ってはつきりと別れのあいさつも、お世話になったお礼も言ってこなかったように思いました。そのことが昭和六十三年八月、四十二年ぶりに再会できるまで私の脳裏から（心の奥底から）離れることはなかったのです。集結所は旧陸軍の将校官舎だった所でした。そこで頭から真っ赤な血をにじませ包帯をした痛々しい主人を見ました。まともには見られない哀れさでした。でも現にそこに姿を見たときは、先ほどまでの心配もなくなりました。自分も心を持ち直して、主人にも自分にも元気づけました。大勢の人たちがそれぞれカーテンなどで間仕切をして部屋が作ってありました。日本人街の人はいち早く情報が入って昼過ぎにはもう集結所に入られたそうですが、私は中国人の一郭にいて知らされなかったのです。皆さんが集結された所で「中川がいない」ということで二度にわたって私たちを捜しに来てくださったのです。そんな、こんなで私たちが一番最後に入りましたので、関係の人たちは一様に安どされたそうです。

私たちは寺本さんの隣に部屋を作りました。四畳半もあつたでしょうか。敷布をカーテンにしました。お隣との間仕切りでした。集結所では、ただ引揚げの案内を待つのみでした。男の人は集結所の樹木を片っぱしから切って薪にするのに一生懸命でした。石炭もあまりなかったのです。毎日いろんなデマが飛び交いました。引揚船は内地に行かず朝鮮に向かったとか、ソ連に行くとか台湾に上陸したとか、本当のことはだれも知らないのです。昼間は割と静かな集結所も夜になると、どこからか、「ヒューヒュープシュー」と異様な音がひっきりなしに聞こえてきました。総動員して窓側に布団など積み上げてバリケードを作り、肩をよせ合いじーっと時を過ごしました。私など大きなお腹をかかえて恐ろしくて生きた心地がしませんでした。三、四夜ほどそんなことがあってまた静けさを取り戻しました。また、それぞれ引揚げ荷物の整理などしていました。

私は出産予定日がきてもなかなかその気配がしません。私はもし生まれない先に引揚げが決まったら、主



人と子供は先に帰ってもらい自分はしばらく張さんの所でお世話になることにしようと、のんきなことを考えていました。

年が明けて昭和二十一年一月二十一日、早朝五時二十分、主人の同僚の奥さんの産婆さんと寺本さんに手伝ってもらって、このせまい集結所の中で二男を無事に出産しました。その三日後一月二十四日になって、二月二日に集結所を出るといふ布令が回ってきたのです。母乳もでたのでホッとしているときでした。出発まであと十日もありませんが、今となつたら何とかして一緒に帰りたいと思ひそのことばかり考えていました。生まれた子供は、日本の再建に役立つてほしいと願つて、「健一」と名づけました。二月二日の田舎ではお正月です。そして一年中で一番寒い季節です。大寒の長辛店は粉雪の舞う冷たい朝でした。

私は二人の子供を一本の白木綿の帯でおんぶしてねんねこたんぜんを健一に頭からかぶせるようにしました。長男の哲邦は重いし赤ん坊の健一は軽くていつも体が右に右に行くように思いました。持てるだけの荷

物は主人が大きい重いもの、私は両手に持てる限りの子供もの（大方はオムツ）でした。産後の十一日目の体でしたが、みんな帰るといふ安心もあつて体のこととは少しも気になりませんでした。駅で待つて待つて待ちくたびれたころに来た引揚列車は貨車でした。荷物と人として身動きできないほどのギューギュー詰めた（引揚船団一千人単位で移動したそうです）。いよいよ貨車が長辛店を離れるとき、私はその辺に張さんの家のだれかが見えないかと背伸びして見回しましたが無理でした。私は心の中で「さよなら張さん、おばさん有り難う、張さんの皆さん」と叫んでいました。生まれて間もない健一は奥の荷物の上にそつとねかせて、長男は何とか膝の上のせて足がこちこちになりました。せまい中を「ごめんさい、すみません」と遠慮しながら健一にお乳を飲ませるのがやつとでした。貨車は駅でない所（原つばなど）で何べんも止まりその都度、用足しに降りられる人が多くて、まるで何かの群れを見るようでした。普通の倍以上もかかつて次の収容所天津の貨物廠に着きました。貨車の中で

の窮屈さから思うと大変有り難いと思えました。屋根はありましたが土間にアンペラ一枚の所でした。

二月の天津も厳寒でした。オムツ洗いが一番難儀でした。あまり遠くない所に川がありました。川は全面厚い氷に覆われていて、何とか手が入るほどの穴を開けてもらい、厚い氷の上で氷にあいた穴の中で洗うのです。その冷たさも格別でした。それに干し場がないのでした。外はすぐかちかちに凍ってしまいます。

乾くのがなかなかでした。私は長辛店にいたとき、陶さんがオシッコのオムツは洗わないで乾かしてまた使っていたことを思い出して、何べんかそんなこともしました。極限の生活ではふだんは考えられないこともしました。その中でも子供たちは元気に育ってくれたのが私の何よりの救いでした。

天津を出て塘沽に移動しましたが、引揚船の出港予定がなかなか立たないのでした。三月の初めはまだ寒い日が続きました。外にテントを張って土間にアンペラ一枚の上でまた無意味な幾日かを過ごしました。待ちに待った乗船が決まると、みんな一斉に元氣を取り

戻しました。乗船のときの検閲には有無を言わず、私は父のかたみの腕時計を抜かれました。情けなく、とても残念でしたが、今はとにかく内地に帰ることしか考えないことにしました。二日も青い海ばかり見ていたので、ずーっと向こうに緑の島を見つけ、だれかが「日本だー」と言ったとき、みんなで歓声をあげました。

昭和二十一年三月十二日に佐世保港に上陸しました。検疫などいろいろな手続もすませるとトラックに乗せられて駅まで行きました。佐世保の駅からこぼれそうな満員の引揚列車は長辛店からの貨車の中の様子を思い出させました。

米原経由で北陸線小松駅に着いたのは三月十四日でした。故郷での落ち着く先は主人の実家でした。食料不足の時代に七人家族の中に何の前ぶれもなく、一度に四人も増えたのです（今思うと本当に大変なことだったのです）。主人の実家は父親の代からの材木商で、長兄が跡を継いでいました。当時としては大きな製材工場を持って手広く商売をしていました。主人はそこ

で働き私は農業の手伝いをしました。何といつても食料の確保が先決だったのです。長男の哲邦の手を引いて野良に出て、その辺りで一人遊んでいました。二男健一はまだ三カ月そこそこですのでねかせつきりでした。主人の実家のお陰で親子四人ひもじい思いをしなくて過ごしました。

翌年の秋、実家の後に小さな家を建ててもらいました。十畳二間と玄関に台所があつて屋根は杉の木の皮で葺いたものでした。物資が不足している時代に私たちには破格の新家屋でした。昭和二十三年七月二十六日に三男光男が生まれました。少しずつ落ち着いたかと思う昭和二十六年ごろから主人の持病の腰痛がだんだんひどくなり、仕事に行けない日が続きました。このままでは家族五人の生活も危ぶまれるようになり、長兄の協力も得て、木材製品の販売をと小松に店を待ち、少しずつ手がけておりました。商売を初めて半年も経たない昭和二十八年三月二十日、主人はついに帰らぬ人となりました。

引揚げから七年経った年でした。私は真つ暗やみの

どん底につき落とされたように思いました。世間では戦後の復興を目指して少しずつ活気づいて行く中に、私の第二の戦後が始まりました。残された三人の子供は、長男は九歳、二男七歳、三男五歳でした。私ども母子は二人三脚ではなくそれこそ手に手を取って助け合つてきました。昔の人は「子宝」という言葉をよく使いました。私はこのときこそ本当に子供は宝ということが身にしみました。子供たちには時折、毛利元就の三本の矢になぞらえて、男の子三人が力を合わせて事に当たれば何も怖いものはないとも言ひ、また一人が一年に一つ年を重ねるなら、この家では三人合わせて三つずつ大きくなるのだから、それも大きな財産になるのだとも言ひました。子供たちに聞かせると言うより、自分に聞かせて勇氣づけていました。子供の前では決して涙を見せまい。また涙している場合ではない。それより何より生活のめどを立てなければならぬ。そんなとき、村の民生委員の方が親切に生活保護を受けるようにと言われましたが、私は何のめどもないのになぜか、「石にかじりついても」と、それは辞

退しました。すると能美郡の母子家庭のお世話をしてくださる鈴木先生から、奥山の学校だけど一年だけいい、二年目は里の学校に来てもらうから、新保小学校の先生にぜひ行ってほしいとお話がありました。私も中国に渡る前の経験も少しありましたので、ちょっと心が動いたのですが、すぐに子供のことがひらめいたのです。三人の子供を連れて行くわけにいかない、かといって実家に預けるのも無理とも思いました。たとえ預かってもらっても、一年も子供と別れて暮らすなどどうしても考えられなくてこれも辞退しました。

その年の秋、女学校時代の友人が勤める生命保険会社に入社を勧められ外務員になりました。そこは毎日出勤しなくても出来高次第で、毎月給料がもらえるということでした。村では何でも半年決算でしたので、毎月の給料は魅力がありました。

昼間は田んぼに出て働き、夜は募集活動でした。契約が成立すると、もうとつくに寝ている子供たちを起こしてまで話しました。子供はねむたくてウンウンとだけ言ってまた眠ってしまいました。でも私はそれだ

けで心の安らぎとまた、明日への力づけになりました。そんなささやかな出発でしたが、以来二十七年三月、大勢の皆様のお陰で大過なく定年退職まで勤めることができました。

その間に中国との国交も正常化し、昭和五十年六月には石川県婦人友好訪問団の一員として北京、天津、大連、瀋陽と回りました。そのころ、中国は文化大革命の最中でした。私は旅行中どこにいても、もしも張さんや陶さんとひよっこり合わないものだろうかと、そんなとてつもないことを考えて目を光らせていました。私の臉の裏に焼きついて忘れることができない、私には大恩人の中国人張さん一家を探続けました。

中国語の先生、中国人、中国公安局などいろいろと手を尽くしましたが、ナシのつぶででした。年が経つにつれて会いたい。会って昔お世話になったお礼の一言も言いたい、思いはつのるばかりでした。人口十一億ともいわれる広大な中国での人探しでした。九割九分のあきらめと又は残る一分に望みをかけて、中国語で知り合った中国飯店の陳さんに相談しました。陳さ

んは何通でも続けて出して見なさいと言われた。同じ文面を陳さんに手伝ってもらって一週間に二通出した。した。

昭和六十三年二月十八日でした。見慣れない封筒が届きました。『中国内蒙古包頭市 張興久』私の待ちに待った張さんの息子さんからの手紙でした。嬉しくて嬉しくて開封するのももどかしいくらいでした。驚きと喜びで体の中が熱くなるように思いました。待ちに待った手紙には『今は八十九歳になる老母はあなたの手紙を読んできかせると、鼻をすすりながら「どんなにか苦労しただろうに」と言つて喜んだ』と書いてありました。私はこのおばさんがまだ健在だということとは最高に嬉しく有り難いと思いました。父親は十年前に亡くなったと書いてありました。私の一週間に二通の手紙は、昔の住所の河北省涿県だったのです。内蒙古まで届くはずはありません。続けて出したので、郵便屋さんはその村に住んでいる張さんの従兄の人に渡したそうです。この人が内蒙古に転送してくれてやっと届いたのです。奇跡というしかありません。張さ

んの言葉を借りると「神様が私たちの友情に感動して連絡してくださった」のだそうです。私はもしも万に一つも張さんと文通ができたらと願つて、もう老境に入った六十歳を幾つか過ぎて、中国語教室に通つて習つたのが、今いくらか間に合つたことも嬉しく感謝しています。辞典と首つ引きでも返事を書くのに一日がかりでした。そして四月六日に石川県日中友好協会の北崎可代さんから、今年八月に内蒙古行きの旅行があるからとのお誘いの電話をいただきました。渡りに舟とはこのことかと、私の胸はもう一度高鳴りました。

三月に文通ができて、八月にもう会えるかもしれない。夢のような話です。中国に渡つて以来、終戦から引揚げまで言葉に言い尽くせないほどのご恩があるのが、張さん一家でした。当時、集結所の近くに張さん一家がいるのに、外出はままならず、一度も会わずに別れてもう四十三年の歳月が流れました。草の根を分けてでも探したいと思つていた人と再会できるのです。

八月二十六日大阪―北京―大同―呼和浩特と、石川県内蒙古日中友好訪問団に参加しました。北京では団

の人たちが、万里の長城などの見学に行っている約六時間余りを別行動させていただき、昭和三年に訪中した折の通訳をしていた徐さんとそのお母さん、長辛店で斜め筋向かいの陶さん夫婦と息子と娘と、北京の病院に勤める張さんの長女と包頭から来た長男の嫁さんと、私は懐かしい中国の友人と初対面の若い人とも昔から知っているかのように、楽しい時を過ごしました。大同からバスで内蒙古賓館に着くと、そこに張さんと長男と二女が迎えてくれました。今はもう白髪になられたが、昔の青年の面影は十分見受けられ懐かしさでいっぱいでした。私は今回の訪問予定にない包頭市の張さん宅を訪問することをお願いしました。日中友好協会の金原博団長さんのご熱意ある交渉と、内蒙古側の理解とで、難しい個人宅訪問の一泊二日が許されました。

翌朝八時にまた三人で迎えに来てくれました。私は妹にも同行してもらい、指定されたタクシーに乗りました。しばらく行くとおばあさんと孫が一緒に迎えてくれました。八十九歳と思えない確かな足どりでした。

私は車から降りると飛びつくように抱き合って、感謝の涙でむせび再会を喜び合いました。考えていた中国語は口から出ません。ただ元気で会えたことを喜び合いました。「さあ泣くのはやめて車に乗りなさい」と言われるまで気がつきませんでした。車に乗ると助手席に張さん、後の席はおばあさんを中心に私と妹と、お互いに手を取り合って片言の中国語で一生懸命話しました。聞き覚えのある声がよく聞きとれてとても嬉しく思いました。昔の生活のこと、子供のこと、食べ物のことなど糸をたぐるようにして話をしてくれました。嬉しくて嬉しくて、まるで「夢のようだ」「夢のようだ」とおばあさんと私はわかるがわる同じことをくり返していました。包頭市までの三時間半も短いように思いました。私たちを迎えるために集まって来られた、曾孫まで一族十六人がまるで昔からの親友のように親しみを込めて歓迎してくれました。おばあさんの部屋に入ると、そこには集結の日に置いて来た鏡台がありました。四十三年前のものが、一点のくもりもなく、スーツと引くと引出しの中は何も入っていません

んでした。漆塗りもピカピカでした。懐かしくて涙が出そうでした。私たちは身に余るもてなしを受け、感謝と感激の連続でした。私の大好きな餃子も「昔、おばあさんと一緒に作った味と一緒だ」と言ったら、「本当だ本当だ」と言って大きく笑われた。私の片言の中国語と筆談で最後は中国の「海は故郷」、日本の「北国の春」を孫のオルガン伴奏で合唱し、その上「君が代」まで出たのには驚きました。私の生涯での念願がこうして達せられたことは多くの方々のお協力のおかげでと神仏に感謝せずにはいられません。おばあさんは一昨年（平成四年四月十三日）九十二歳の天寿を全うされたことを知らされました。親孝行の息子夫婦一族に守られ大往生されたそうです。私は生前の感謝を込めてご冥福を祈っています。揚公荘生まれの長男は石川県中小企業アドバイザーを、集結所生まれの二男は燃糸業、三男は自動車販売修理業とそれぞれの道を懸命に歩んでいます。

私の戦後は中国の恩人との再会でようやく終わりました。

#### 【執筆者の横顔】

中川初枝さんは大正九年一月二十一日、小松市街地より十数キロ山手の農家の森家に生まれ、父は昭和十二年応召になり、残った母は子供をかかえて田畑、山仕事に至るまで一人で大変な苦勞をし続けていた。

向学心にもえていた初枝さんは、石川県立小松高等女学校を昭和十四年三月卒業、戦争たけなわの折とて軍需工場の小松製作所に就職、この年の九月に父は北支の戦線から生きて帰ってきた。

後に教員不足のため小学校の代用教員に懇請され、教員として楽しい青春を送っていたとき、中国で鉄道員をしていた母のいところからの縁談があり、中国に心の深かった父の勧めもあって、昭和十七年十月夫の実家で結婚式を済ませ、四日後に夫の勧め先、「華北交通」のある、中国河北省宛平県長辛店へと旅立ったのである。長辛店揚公荘三号の社宅での生活は、隣近所はみな中国人で不安やら期待やらこもごもの毎日であったが、社宅の向かいに張さん、斜め向かいの陶さんは夫と同じ華北交通に勤めていた。主人は長期出張

が多く異国の地で言葉も分からず、日本にいる親が恋しく涙の日が続いた。そんなとき、向かいの張さん、陶さんの奥さんが、中国語を覚えてくれたり、買物、石炭の使い方、昭和十九年二月長男（哲邦）のお産に何から何まで、至れり尽くせりの面倒をみてくれた親切は生涯忘れられない。

昭和二十一年一月戦後混乱のさ中に二男が生まれた。引揚げ後二十三年に三男が生まれ、二十八年三月夫は過労のため病死、暗闇のどん底につき落とされた悲しい思い、そのとき、三人の子供こそ、わが家の宝であると言いつつ、生命保険外車の外務員となり、日夜募集活動に専念、三人の子供を養育して二十七年間勤めた会社を退職。その間中国語を勉強して訪中を企画、四十三年間初枝さんの脛の裏に焼き付いて忘れることのできなかつた中国での大恩人、張さん、陶さんを探しつづけていた。

昭和六十三年三月、ついに今は蒙古包頭市張興久に住んでいるとの、張さんからの返信に飛び上がって喜び、同年八月石川県内蒙古日中友好訪問団に参加し、

懐かしの張さん、陶さん夫婦と四十三年ぶりの再会、抱き合って感激の涙にむせび、ありし日のお札をのべ、お互いの健康を喜び合った。

これで中川さんの張さん、陶さんに対する長い間の思いがかない、私の戦後は終わったと言っておられる。

（社）石川県引揚孝厚生同盟

会長 久木 孝作

フィリピンから

孤児となった初恵を連れて

東京都 三橋 真砂

（ローズ・キャサティ）

東京にいる妹禮子にフィリピンの山中での出来事を書いてみないかといわれていろいろ考えた。山の中で避難していて、孤児になった「初恵」を日本に連れて帰ったことが昨日のように思い出された。そして現在では、ルワンダの児童や幼児の悲惨な情況が身にし